

1. はじめに

一般社団法人全国専門学校教育研究会では令和2年度～4年度にかけて、文部科学省「職業実践専門課程等を通じた専修学校の質保証・向上の推進事業」を受託し、専門学校教職員の資質能力向上の推進という目的のもと、「非認知能力に焦点をあてた学習評価の知識・方法の獲得」研修プログラムを開発した。

この手引きは、開発した研修プログラムの普及のために、研修プログラムの活用を検討する学校管理者や研修講師を想定して、目的・構成や特徴・効果等について説明するものである。

2. プログラムの目的

(1) プログラムの背景

本プログラムの背景は大きく2点ある。

第1が、専門学校教育における「非認知能力」への着目の必要性の高まりである。社会状況の変化のなか、「コミュニケーション能力」や「主体性」をはじめとする「非認知能力」が、職業社会からの専門学校への教育ニーズとして高まっている。もともと、専門学校においてはこれらの非認知能力は養成されてきたが、専門学校教員において、非認知能力に関する適切な認識がなされているとは言い難い。社会のニーズに対応するためにも、また、専門学校において養成する能力についての適切な自覚を持つためにも、非認知能力に関する一定の知識・理解は専門学校教員の資質能力の核となると言える。

第2が、専門学校教員における学習評価に関する知識・技能の向上の必要性である。全国専門学校教育研究会が平成29年度に実施した調査においては、専門学校教員に不足している専門性として「学習状況を把握し、適切に評価するための知識やスキル」（学習評価）が上位にあがっており、全国専門学校教育研究会では、専門学校教育における学習評価に関する研修プログラムの開発も行ってきた(平成30年度～令和元年度)。本プログラムは、その発展的なバージョンとして位置づく。

(2) プログラムの目的

本プログラムの目的は大きく3点ある。

① 専門学校教育の強みとしての非認知能力に着目する志向性の獲得

社会的ニーズが高まり、専門学校教育の強みとしても打ち出していくことができる非認知能力について、まずは、教員が着目していくことが必要である。そのために、プログラムでは、専門学校と非認知能力の関係性とその意義についての理解を促進していくことに第1段階の目的を設定している。

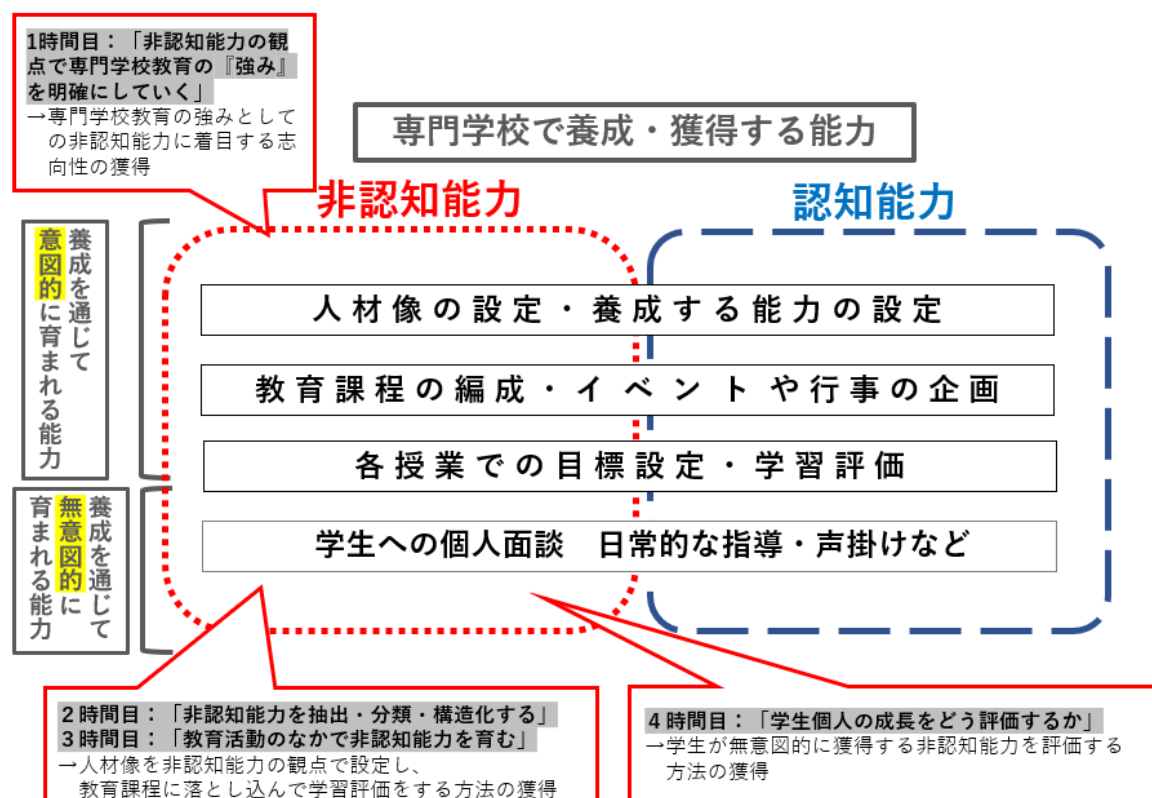
② 人材像を非認知能力の観点で設定し教育課程に落とし込んで学習評価をする方法の獲得

いわゆる専門的知識・技能や、職業資格などは明確化しやすいため、人材像の設定、教育課程の編成などに落とし込みやすく、各授業での評価についても一定の理解がされている。他方で、非認知能力に関しては、そもそも明確化することが容易ではなく、教育活動に落とし込むこともなかなかされていない。したがって、本プログラムでは、学科が養成する非認知能力とは何か、それをどのように教育課程に組み込み、評価していくのかという点に焦点をあてて、そのための知識と方法の理解を促進していくことを第2の目的としている。

③学生が無意図的に獲得する非認知能力を評価する方法の獲得

専門学校生は、必ずしも教員側が意図する形での学びや成長をするわけではない。非認知能力においてもそれは同様であり、学生は、教員側が意図したものとは別の非認知能力を獲得していく場合も多い。こうした、非認知能力に関する多様な学びや成長を、把握し評価していくことも、学生の自己肯定感の促進等にとって重要な働きかけとなる。したがって、本プログラムでは、多様な学生の非認知能力の伸び・成長を把握し、評価するための知識・方法の理解を促進していくことを第3の目的としている。

研修の全体像と研修の構成要素（各時間での学習内容）の関係



(3) プログラムの対象

本プログラムが主たる対象とするのは専門学校教員である。教員の階層・雇用形態等についてはとくに限定はしていないが、所属する学科における非認知能力をテーマとしてグ

ループワーク等を行っていくので、同学科の教員が複数いることが望ましい。

授業形態は対面型。受講者数の適正規模は、10人～20人程度。最大で50人程度を想定している。

3. プログラムの構成

プログラムの構成は以下のような4時間構成となっている。

時限	タイトル
1時間目	非認知能力の観点で専門学校教育の『強み』を明確にしていく
2時間目	非認知能力を抽出・分類・構造化する
3時間目	教育活動のなかで非認知能力を育む
4時間目	学生個人の成長をどう評価するか

(1) 1時間目：非認知能力の観点で専門学校教育の「強み」を明確にしていく

本プログラムに対する受講生の興味関心を喚起するためには、全体のキーワードとなる「非認知能力」を学ぶことについての納得感を持たせる必要がある。そのために、1時間目ではまず、非認知能力の基本的な知識をおさえたうえで、非認知能力の養成が専門学校教育の「強み」になりうることを、そして、その「強み」を認識し活用すべきであることを、提起する。主に、プログラム目的①に対応する。

(2) 2時間目：非認知能力を抽出・分類・構造化する

非認知能力を教育活動に落とし込むためには、学科で育成する人材像の能力に非認知能力を位置づけ、明確化する必要がある。2時間目では、その過程として抽出・分類・構造化という3つの段階に整理し、抽出・分類の2つの段階に焦点をあてる。抽出・分類についての説明とワークを通して、自身が所属する学科で養成する非認知能力を明確化するための知識と方法を理解させたい。主に、プログラム目的②の前半部分として位置づく。

(3) 3時間目：教育活動のなかで非認知能力を育む

人材像として明確化された非認知能力は、教育課程や授業、行事などに落とし込むことが必要である。3時間目では、「非認知能力を授業や行事、到達目標、シラバスに具体的に落とし込む方法とは」という問いを掲げ、主に、非認知能力の教育課程編成への組み込み方と、コアとなる授業での目標設定・評価方法の仕方に焦点を当てて、そのための知識と方法を理解させていく。2時間目を前提とする授業であり、受講者同士の事前ワークなども組み込んでいる。主にプログラム目的②の後半部分として位置づく。

(4) 4 時間目：学生個人の成長をどう評価するか

専門学校において非認知能力の獲得を「強み」として打ち出していくためには、「学科で重視する力」以外にも目を向ける必要がある。4 時間目では、多様な学生たちの特徴・個性や成長の多面性を把握するうえで非認知能力の観点が効果的であることを示したうえで、非認知能力を組み込んだ「個人シート」と「個人面談」のワークを通して、実際の教育実践での活用方法を理解させていく。主にプログラム目的③に対応する。

4. プログラムの特徴と期待される効果

(1) プログラムの特徴

本プログラムの最も大きな特徴は、開発過程にある。専門学校の教務責任者と専門学校研究者が、3 カ年にわたって共同的に調査・開発に取り組むなかで作成されたプログラムとなっている。この過程において、特に重視したのが、専門学校教員に適切な研修内容の開発である。教務責任者が提供する現場における具体的な課題感や研修ニーズ・研修レベルなどの情報をベースに、専門学校研究者が教育学などの理論を専門学校教育に応用する形で、プログラムのプロトタイプを作成し、たび重なる実証講座と改善を経て、完成へと至っている。

(2) 期待される効果

研修の効果として特に重視したのが、教育実践と研修の関係を循環的なものとするところである。

今回のプログラムのテーマである、非認知能力の養成や、その学習評価は、専門学校教員が日々取り組んでいる教育実践そのものである。だからこそ、研修は、その日々の実践を意識化・共有化する契機として役立つものとして、そして、教育実践を具体的に改善できるものとして、受講者側に受け取ってもらえることが肝要である。

その点を強く意識して、研修開発にあたっては、研修参加の心理的負担の低減や、研修で獲得できる知識や方法の実践のしやすさ（運用負荷の低減なども）の考慮、学科単位でのグループワークを通しての振り返りの機会の作成など、様々な工夫を盛り込んでいる。

本研修プログラムの活用を通して、多くの専門学校教員の日々の努力が意識化・共有化され、そして、その努力が教育改善という形で報われていくことを、開発者一同、心から願っている。

○プロジェクト参加者

植上 一希	福岡大学	佐藤 昭宏	ベネッセ教育総合研究所
小田 茜	久留米大学	丹田 桂太	九州大学
上里 政光	学校法人 KBC 学園	高岡 信吾	学校法人三友学園
岡村 慎一	学校法人 YIC 学院	近藤 賢宏	学校法人 KBC 学園
岩崎 千鶴	学校法人三友学園	田澤 初美	学校法人京都中央学院
水田 真理	学校法人片柳学園		